

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「坂本龍馬と中学生」 讃岐龍馬会塩飽社中

坂出市立東部中学校校長
野藤 等



はじめに

私は大学生の頃出会った坂本龍馬の魅力に魅かれて四十年以上になろうとしている。

中学校教師になってからは教室や全校集会などで龍馬の話をしてきた。子どものときは、「坂本家によばあたれ」と呼ばれ、ごく普通あるいはそれ以下の子どもであったという龍馬が、今や歴史上最も人気のある人物である。優しく平等観のある龍馬は生徒だけでなく、我々教師にとっても教えられることが多い。もちろん私自身、龍馬たちが近代日本を創ったことに日本人としての誇りを感じているし、努力によって成長を遂げた龍馬に、深い共感をもって毎日を生きる指針にしている。

そんな私の三十数年に及ぶ教師生活の中で、印象深い話をしてみる。



龍馬を通じた生徒の成長

新人教師時代から私は学級担任として生徒に龍馬の話をしてきた。

二年生のある男子生徒は、勉強にもう一つ身が入らず、授業中、居眠りをすることがあり、よく注意をしていた。ところが放課後、野球部で練習をしている様子を見て、その生徒の新しい顔を見た気がした。

私は彼に、龍馬が小栗流の剣術の道場に通いだしてめきめきと腕を上げ、ついに免許皆伝になり、自信をもってたくましい人間に成長したことを話した。そして、「君も野球という特技があり、それに毎日励めば自信のない龍馬が剣術で自信をつけたように、きっとすばらしい人間に変身できるよ」と励ました。

その後、その生徒には少しづつ変化が見られるようになり、三年生になったときには進路相談で「ぼくは〇〇商業高校に入り、甲子園に出場したい」と話すようになった。見違えるように授業態度が変わった生徒は、野球でも今まで以上に力を発揮し、見事志望校に入学を果たし、甲子園にも出場した。活躍する彼をテレビで見たとき、私は彼の夢の実現が我がことのように嬉しかった。彼はその後、高校教師になり野球部の顧問をしている。

また、成績も悪くいじめにあいやさしい男子生徒がいた。その生徒には、毎日のように「龍馬のようになれ!」と檄を飛ばした。高校生になった生徒は少林寺拳法に励んだ。高校卒業前に、私のところに就職の報告に来た彼は、人間として一回り以上の成長を遂げていた。見事な人間革命である。ほかにもそういう生徒たちはいるが、彼らの成長ぶりに私はいつも龍馬を重ねている。

いじめに負けない生徒

校長になってからは、全校集会で講話をするときなど龍馬の話をしている。特に人権尊重について話をする際は、龍馬の継母の伊与が、龍馬に言って聞かせた話は効果がある。

伊与が龍馬に言い聞かせた三か条についてである。一つめは、男は強くてやさしくなければならない。二つめは、人をいじめはならない。三つめは、いじめられたら、やりかえせ。この最後の言葉を生徒に語るときは、人からいじめにあったときは、黙っておかずに誰かに言いなさい、と指導している。

『坂本龍馬—隠された肖像』(山田一郎著)によると、実母が亡くなった後、龍馬は三歳年上の乙女姉さんに育てられたのではなく、武家出身の継母伊与が厳しく躾け、たくましく成長していくということで、伊与の存在は大きい。

私の専門教科は英語であるが、一時社会科を教えたことがあった。そのとき、授業の最初の行う五分間テストで、龍馬のことも出題して生徒の興味関心を高めた。例えば、「龍馬が十二歳の時、悲しいことがあります。それは何だったでしょう?!兄が亡くなったこと、母が亡くなったこと、父が亡くなったこと」というような具合である(正解は)。

解答するとき、実母・幸のことを話すなど龍馬についての豆知識を織り交ぜた。実施一年後には、生徒は「龍馬博士」になっていた。卒業した生徒が、「龍馬の話は面白くて役に立ち、歴史が好きになりました」と言ってくれることもあった。

龍馬の人間的魅力

龍馬が身分制度に反対し、身分差別のない世の中を目指していたことは、教師として学ぶべき理念である。また、生徒に伝えたいエピソードも多い。

亀山社中や海援隊長時代、隊員と同額の月三両二分あるいは五両の支給を受けていたことは、身分制度の厳しい時代には考えられない龍馬の平等意識である。人から馬鹿にされた隊士を、「身分が卑しいものもいるが、はらわただけはきれいだ」と言った龍馬。私は目頭が熱くなった。龍馬はリーダーの理想像である。

私は時代小説家の童門冬ニ氏が講演で語った、龍馬の『ならイズム』に感銘を受けた。龍馬はどんな人も魅了して、「龍馬のためなら」といって支援を惜しまなかった人が多いと童門氏は語られた。これを「風度」というらしい。この「あの人の言うことなら聞こう」という『ならイズム』

があれば、人生において成功するともい。生徒に「あの先生の言うことなら聞こう」といわれるが教師の理想であろう。

また、日本中に笑顔の種まきをしているエッセイストで“笑顔共和国大統領”的福田純子氏が講演で語った「龍馬のとりあえずやってみよう」の精神も面白い。龍馬は、人から良い話を聞くと、とりあえず実行に移ったという。物事を成し遂げるためには、龍馬のようにすばやい行動力、実行力は「とりあえずやってみる」ということに端を発して

いるらしい。学校現場で「いいことはすぐに実行に移す」ことは大事であり、即効性のあるこの精神は私の教育哲学になっている。

人間的な成長を遂げた龍馬の人生を生徒たちに語るとき、教育的な価値が多くちりばめられているような気がする。司馬遼太郎氏は、「龍馬は世界のどの文明圏においても共感される青春像を持った英傑」と語っているが、私は龍馬のすばらしさをこれからも、生徒に語り継いでいきたいと思っている。

「ほれ話」で龍馬を語る

私と龍馬の出会いは、「二十歳の頃、会社の友人から『橋詰さんは、橋原の出身やきこれを読んでみたらいいよ』と薦められた司馬遼太郎の『龍馬がゆく』でした。読んでみると、なるほど橋原の地名や幕末の志士の名前が登場するではないですか。「たいしたもんじやあかんけど、どうしてこんな山奥からたくさんのお墓の志士が輩出されたのだろう」などといつ疑問を持つよりも、少しすらすらや土佐の歴史に、そしてその時代に生きた草莽の志士たちに思いをはせるようになりました。そんなまだ、青二才の頃、カチンとくる事件がありました。高知県文化ホールで司馬遼太郎さんの講演会が開かれました。中村から大雨の中を聴きに行つたのですが、開口一番司馬さんはこうおっしゃいました。「高知の龍馬会などという人たちの中には、竜馬を自己同化させ喜んでいた方がいました」昔の土佐はたいしたものでした。これから高知をどうするべきか真剣に考え行動してください。過激な内容でした。講演を聴いていた時は、「この人は、高知に講演を依頼されているくせに失礼やないか」と思つたものです。しかしこのことは後に土佐が大好きな司馬遼太郎さんの「心からの叫び」だったと理解いたしました。

現在の私は、高知市観光課や龍馬記念館のイベントで「龍馬脱藩の道」を何度も案内させてもらつた縁で龍馬記念館のカルチャーサポーターとして「カルサボ」をさせてもらつています。龍馬が暗殺された「近江屋」の原寸大セットの前で龍馬の衣装を身にまとい「龍馬を知る楽しさ」を来館者にお伝えしています。来館者は子供からお年寄りまで、また初心者から専門家まで様々ですので、話の切り口や内容には苦労しています。まずは、「どちらからお越しですか?」と声がけし、龍馬との糸口を掴むことで親しみやすい身近な話題を提供するように心がけています。東京であれば千葉道場や品川砲台のこと、神奈川や山梨であればお龍さんや佐那さんのお墓のこと、北海道であれば坂本家や直行さんのことなど、龍馬に関する身近な話題を提供していると、お客様からも意外なことを教えていただくこともあり、「出会いの達人」龍馬さんの「利益をいただいています。

最近ですと、近江屋の末裔の方や、徳川慶喜さんのひ孫さん・勝海舟の夜叉孫さんなどとも会うことができ、「オレも、歴史のなかに生きちゃがや」と感動したことでした。こんな具合に、休日はできるかぎり龍馬記念館のカルサボ(軽くサボ)の意実もある、「出勤」です。「龍馬を知る楽しさ」を多くの方にお伝えすることが「ライフワーク」。楽しいお話をした。「また高知に来たいと思います」と言つていただきオードリーのような素敵なお客さまと出会えることを楽しみにこれからも、「リヨーマの休日」を楽しみたいと考えています。

坂本龍馬記念館カルチャーサポーター 橋詰 明仁

コラム・龍馬のこと

外国にも“龍馬熱”

橋本 邦健

龍馬熱といおうか、龍馬の機運は益々増幅するばかり、それは来年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」に象徴されていると思う。現在、龍馬を名乗る会及び組織団体は、日本各県及び外国を含めて131を数える。

先日、知人を通じてオランダ人が面会を求めてきた。大変上手な日本語を話すことで、外国人の苦手意識も払拭され、龍馬談義で盛り上がった。日本は二度目で日本語は地元ライデン大学で学び、インターネットで龍馬を研究した大変な龍馬ファンであった。オランダにも龍馬会を作ろうとの意識に至る。もともとこれが主たる目的であったように思われた。長崎の出島、オランダ坂等と連想して意義深さを感じる。

手土産として自作の龍馬胸像(約七キログラム)を、壊れることを恐れ、手持ちで持て来たとのこと、その精巧さに驚き、その気持ちに感動した。

一昨年にはコンゴのあるメディアのディレクターと名乗る人物がやってきた。キンシャサ(首都)空港初発 龍馬空港着「やっと日本の土を踏みました」と自慢していた。コンゴにも龍馬会を作ってくれるとのこと。どうして龍馬を知ったのかと聞くとやはりインターネットであった。日本でも最近ではマンガから龍馬に入ってくる人が多くなった。合意して渡航手続きを開始したところ、内戦に加えてエボラ熱病の発生により渡航禁止区域に指定され、いまだ実現できていない。しかし、アフリカにも必要なことで、いずれ作っていきたいと考えている。

あの幕末の動乱期に万国公法・船舶等色々の物を道具として利用。短期間にあのように広範囲に東奔西走、自分の社会を広め新生日本の黎明期の幕引きをしたことは周知のとおりである。時代に合わせ、手段、方法を変えて改革、革新に向かって果敢に対座するさまはまさに“龍馬のこと”である。

訂正とお詫び

先の飛騰70号(7月発行)、現代龍馬学会のページ「私のテーマ」の『「夕顔」コンピューターグラフィックで復元』=小松茂久氏=の記事中、ミスがありました。ご迷惑を掛けた関係者の方々にお詫びするとともに、訂正させていただきます。

この記事は、イギリスで建造された土佐藩船「夕顔」のルーツをたどるもので、その中で小松氏が、高知大学人文学部教授のダレン・リングリ氏に取材し「同教授が、文部科学省の科研費などを使って今年8月20日以降、渡英し夕顔の調査を行う」という内容を記事にして発表しました。ところが「文科省の科研費」については、8月時点での経費支出は手続き上からも明らかに不可能な状態なのです。つまり記事は、小松氏の思い込みによる事実無根のものとなってしまいました。その結果、リングリ氏だけでなく、関係者の皆様の誤解を生むこととなりご迷惑をおかけました。ここに紙面を借りて深くお詫び申し上げます。

現代龍馬学会会長 永国淳哉、執筆者 小松茂久

会員便り

「ガムを噛む」

横澤 清子

あつという間に夏が終わり、もうスポーツの秋である。私の世代はなんといてもサッカーより野球の方が馴染みが深い。ピッチャーとバッターの真剣な駆け引きはやはりドキドキさせられる。ところで最近の野球を見ていると、オリンピックにせよ世界大会にせよガムを噛んでいる選手が多いのが目につく。勿論彼らが真剣にやっているのは承知の上だが、どうしても緊張感に欠けているように見えるのは年のせいだろうか。脳の血液の循環をよくして反射神経を高めるとか、平常心を保つとかいろいろ理由はあるだろう。だがガムを噛むという仕草には何か違和感を覚える。



この違和感は何だろうと考えていると、ふと坂本龍馬の妻おりうさん(お龍、お竜、お良)のことが頭に浮かんできた。もう随分前のことになるが、芸能界でも坂本龍馬通で知られる武田鉄矢が脚本・主演した「幕末青春グラフィティ 坂本龍馬」というTVドラマがあった。夏目雅子がおりうの役だったが、役作りの注文に武田はこう言った。特に時代劇らしい演技はいらないからガムを噛んでいるような感じでやって欲しい、と。当時の女性としてはやや異端なおりうさんを、ホップな雰囲気で捉えた武田の狙いは当たっていた。夏目雅子の演じる彼女は、グダグダ大儀名分を言っている男たちを軽くいなし、私は「わたし」と開き直る当時のおキャンな娘そのものだった。

「ガムを噛む」というのは、肩の力を抜いて自分らしくという意味もあるのである。どうやら私の感じる違和感はスポーツ選手はこうあらねばならないという型にはまった思考からくるものだったらしい。